

自衛隊を退官して、はや10ヶ月、少しづつではあるが、民間人になりつつあるようだ。最近では、振り返って「オイッ」と声を掛けたくなくなることもなくなった。この一事だけでも成長したと言うべきだろう。雑踏の中でも気疲れなく歩けるようになったことも成長の証だろう。帯広から帰郷した当初は、新宿や池袋の余りもの人の多さに酔い、辟易した物である。歩いていても対向する人にぶつかるのではないかと気掛かりであったし、回りに注意しながらでないかとともに歩けなかった。良く考えてみれば、旨く調和されているようである。予定調和説とは言わないが、お互いが、お互いに相手の行動を見ながら、(ブツカルか否かを判断しつつ) 微修正しつつ対向して行く。見事に調和されている。もう一つ言えることは、堂々と歩いていけば、道は開けると言うことでもある。そののけそのけお馬が通ると言う訳ではないが・・・。そういく知恵が自然に芽生え働いているのだろう。面白いものだ。今ではそういう事を意識することすらなくなった。これぞ都会人になった証左であろう。

さて、半世紀ぶりの、歴史的なイラク国民議会の選挙が厳戒体制の中実施された。未だ正式発表はないけれども、本選挙に懐疑的な見方をしてきたマスコミや評論家達の予想を裏切る投票率を記録したようだ。最新情報によれば投票率は6割程度と見込まれ、選挙監視に当たったNGOは不正は極めて少なかったと評価したようだ。イラク国民が初めて手にした自由で強制されることのない民主主義である。投票出来る喜びを体一杯に表している人も居たが、さもありません。

確かに、スンニ派が多い地域での投票率が極端に低かった事等により、正当性に疑義が残るとの論評もある。

では今回の選挙を遅らせれば事態が改善したか、答えは否である。何時まで経とうと大して改善されまい。不完全、ある面では不平等の謗りを受けることがあろうとも取り敢えず自由で民主主義的な選挙を実施して政治プロセスを前進させることが肝心である。

六割を超えれば、成功だと言うべきだろう。日本の国政選挙の投票率の低さを見てみれば、6割超は驚異的であり、イラク国民の本選挙に掛ける意気込みが伝わってくる。

武装組織によるテロの脅威が切迫している中での6割である。

日本を始めとする先進民主主義国の選挙と確かに趣は違う。選挙運動もまともに出来ない、候補者名すら直前まで明かされない等々、基準を我国などに求めるべきではない。

確かに、本選挙実施に至るまで、余りにも多くの血が流され、延期も止むなしとの空気もあったことは事実であり、そうすべきであるとの論を張ったマスコミもある。

イラクのフセイン打倒・解放から今日までの道程を見ると『産みの苦しみ』と言うのはこういう事を言うのだなと感じずにはおれない。

今回の選挙が新生イラクの歴史的な第一歩であったと評価される日が何れ来るだろうし、そうなるべく国際社会は一致団結しなければならない。イラク戦争への対応によって国際社会は深刻な危機を迎えた。今こそ、その危機を大所高所に立って乗り越えるべきである。

今後は、新たに選ばれた定数275の国民議会が、暫定憲法である基本法と国連決議1546に基づき大統領を選出、次いで大統領が首相を指名、議会の承認を受け移行政府が発足することとなる。8月中旬には、憲法草案が作成、10月に新憲法を問う国民投票を実施、憲法承認、事後12月には総選挙を実施して年末までに正式政府が発足する。

今回選挙をボイコットしたスンニ派やその他のイラク国民にも次回の選挙は等しく保証されている。次回にはイラク国民が、自らの意思で選ぶ政体・政府が出来るだろうと期待したい。賢明なイラク国民であれば、フセイン政権下での圧制を報復しようなどとは思わないであろう。地域格差や宗派の違いをも乗り越えるだろう。でなければイラクは新生し

得ない筈だ。寛容の精神を以って今後に対応して欲しいものである。

まだまだ厳しい状況は続くだろうし、彼等の産みの苦しみも続くだろう。然し、その産みの苦しみが大きければ大きいほど、出産の喜びは大きい筈だ。

最後に、今回のイラク選挙に関して批判的だったマスコミはどのように評価するのか楽しみにしている。  
(了)